北海道医報
ISSN 0913-0217　2025.8.1. 第1283号
発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011)231-1432　FAX(011)221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 275円(税込)

長州路をゆく
―幕末志士たちの故郷へ―

情報広報部　山科　賢児

長州萩は、吉田松陰をはじめ高杉晋作や伊藤博文らを輩出した、近代日本の夜明けを告げる明治維新の胎動の地である。毛利藩によって築かれた江戸時代の城下町の面影を今もとどめ、江戸末期の石畳や町割が残る城下町の空気は、清々しい静けさに包まれている。春の澄み切った日差しのもと、白壁の武家屋敷街を歩いていると、幕末の志士たちの決意や悔恨を胸に秘めて行き交った光景が、目の前に現れてくるかのようだ。

下関・堺・長門など、欧米列強との最前線に位置する海防の要地を抱えていた長州藩は、英仏米蘭艦隊による下関砲撃事件（1864年）を契機に、幕府の無策を目の当たりにし、政改革が、思想的に革新性の強い志士を生み出し、長州は明治維新の原動力となった。静かな佇まいの松下村塾は予想外に質素で狭い造りであった。

尊皇攘夷の活動拠点としても知られる湯田温泉の「維新の湯」を訪ねた。高杉晋作、坂本龍馬、西郷隆盛、伊藤博文たちが実際に入浴した歴史ある温泉である。インバウンドの喧騒から離れて「維新の湯」に身を沈めると、明治維新を牽引した志士たちが、欧米列強との外交戦略や体制改革について熱く語り合った様子が思い起こされ、歴史を身近に感じる貴重な体験を味わった。

江戸時代は、国内の安定を維持するために鎖国政策を取り続け、長崎貿易などの国際貿易を最小限に抑え、グローバリゼーションの波に流されることもなく独自の発展をとげた時代だった。しかし幕末に欧米列強が続々日本に押し寄せ、ついに開国という現実を受け入れざるを得なくなり、欧米の技術や制度を取り入れて近代化へと進むことになる。明治維新は、外国から押し寄せるグローバリズムの波に適応し、国が生き延びる戦略だったのである。

逆に現在は、保護主義政策を掲げる反グローバリズムの波が押し寄せている。グローバリズムと反グローバリズムの対立の象徴である「トランプ関税」は世界を混乱させ、2025年7月7日、日本には一方的に25％の関税を課すと発表された（現時点では、最終合意は流動的である）。思うに、政府関係者がホワイトハウスに赴き、「持ち帰って検討します」と、決断せず帰国する日本の姿勢は、どう考えても上手な外交とは言えない。先送りの優柔不断な交渉は、結局不本意な条件を受け入れることになり兼ねない。

現代の外交は、もはや軍事力だけに依存するものではなく、「情報・経済・スピード」を駆使して優位性を構築する局面へとシフトしている。SNSやメディアを活用した情報戦、制裁や関税・投資や援助を通じた影響力の拡大が要であり、意思決定の遅れは致命的である。アメリカや中国のような「即断・即決・即主張」の臨機応変な思考に比べると、決断の遅さと責任が曖昧な外交の手法は、日本の社会の空気と共通している。

今日の社会は、「今さえ、金さえ、自分さえ」といった考えに変わってしまい、幕末志士たちが命をかけて国家全体の未来を、大局から見据える視点は希少となった。国民の声よりも大企業との関係を優先し、長期的な制度改革より選挙対策が先行している。政策論よりも利害調整とポジション争いが前面に立つような国が、明治維新の時のように体制改革への強い意志と行動力を持てるのだろうか。

萩城跡指月公園に立ち寄った。「守るに易く、攻めるに難し」と評される萩城の天守閣跡から指月山を望む広大な城内で、志士たちは迫る危機への対応や行動を模索していたはずである。単に藩の利益ではなく、日本全体の未来を考え、行動を訴えた高杉晋作の言葉、「盡国家之秋在焉（国家に盡すのときなり）」は、歴史上の「志」に留まらない。今の我々にこそ、その精神が問われている。

「自衛のため、自ら学び、自ら守る」必要性を痛感した。この危機感が軍制や海防力の強化と蘭学・造船・製銃技術の導入を加速させ、「国を斉（ととの）え、自立せよ」という時代精神を醸成していった。

長州藩はまた有能な人材の育成を目指して「明倫館」や「松下村塾」の整備を進め、身分にとらわれることなく才能ある者を広く登用した。松陰は、塾生らに自主的な討論を促し、行動することの大切さを説き、生きた学問を教えた。攘夷論は「世界を知ってこそ、護国・富国強兵」という現実的な思想へと深化し、開国・洋学導入へと移行した。このように、地政学的危機感、教育革命と大胆な藩